

RJP リコーダーピース

---

ブラウン  
2本のアルトリコーダーのための  
第5組曲

CDの演奏者

長谷川圭子 (リコーダー)

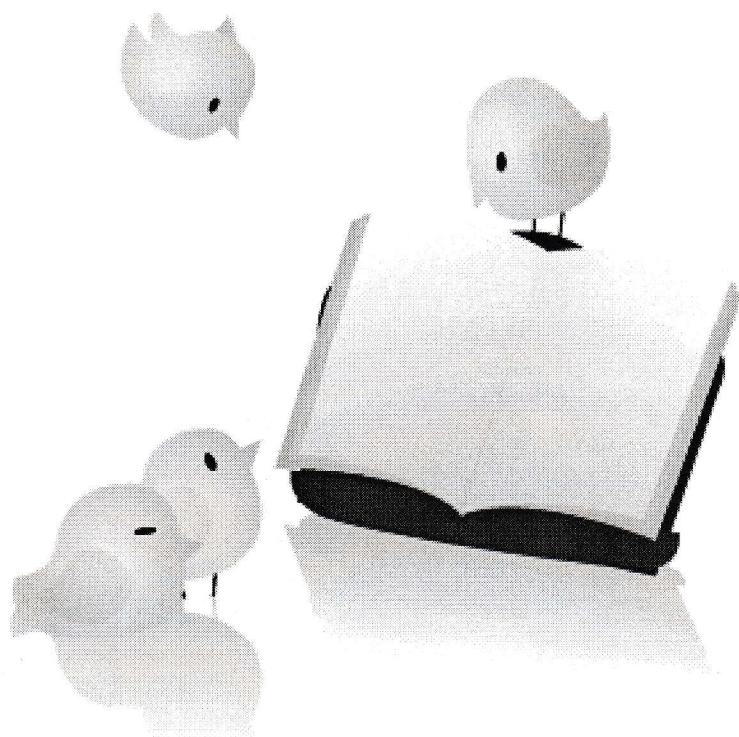
石田誠司 (リコーダー)

J. D. Braun  
**Suite No. 5**  
*for 2 Alto Recorders*

Players on CD

Recorder: Keiko Hasegawa

Recorder: Seiji Ishida



---

RJP Recorder Music Series

## ◆解説◆

前奏曲と5つの短い舞曲からできています。全体に演奏はやさしくて、しかも美しくおもしろく書かれていますので、初級～中級のかたにも楽しめるすぐれた作品になっています。初級のかたは、Sarabande → Prélude の順で始め、あとは気に入った曲に進んでください。休符以外のブレス（息つき）箇所をVで示しましたが、必ずしもこれにとらわれる必要はありません。

### — Prélude — 難易度 B2 —

ややゆったりとした感じのプレリュード（前奏曲）です。

3小節や4小節で音符に付されている+の記号は「トリル」で、tr.という記号を略記したt.という記号から来ているのではないかと思います。初級のかたは、まずこれを無視して練習して、慣れてきてから少しずつところみてください（以下ではトリルに関する解説が多くなってしまいます）。

トリルは「1つ上の音との素早い交替を何度か繰り返す」という装飾で、バロック時代の作品では好んで多用されました。また、バロック時代のトリルは、「上の音から開始」が普通で、Recorder II の3小節の場合ならば、当該音符「レ」よりひとつ上の「ミ」の音から開始し、「ミレミレミレレー」ぐらいに演奏します。このかん途中でタンギングは行わず息を入れ続けながら指づかいだけを変えてください。そして、最後に音符本来の音である「ミ」の音がしばらく聴かれるように時間を配分するのが普通です。

また、トリルは「音の交替をしだいに速くする」のが良い感じになることが多いので、この場合も少しおもむろに始めてだんだん速く音が交替するように心がけてみてください。

Recorder I の3小節、「ファ」のトリルは、「ソ」と「ファ」の速い交替ですから、左手親指の開閉になります。手に力が入ってこわばっていると難しいのですが、逆に言えば、このトリルが楽にできるぐらい手指の無駄な力が抜けている方がいいのです。

Recorder I の4小節などに出てくる「ミ」のトリルは「ファミファミファミミー」ぐらいで演奏しましょう。正規指づかいでは不可能なので替え指を用いますが、音程が正確になるのは、「ファ」には正規の[02]を、「ミ」に替え指[023]を用いる方法です。ただ、最後に少し長めに演奏する「ミ」の音にやや力がないのが不満です。そこで、より本格的な指づかいとして、

[02]→[01]→[0]→[01]→[0]→[01]

という順があります。途中から用いる[0]の指づかいは、本来は「ファ#」の替え指ですから、完全に半音高い「ファ#」が鳴りますが、バロック的な趣味ではこれが「かえって華やかで良い」とされていたようです。

Recorder I の6小節やRecorder II の8小節にある「シ」のトリルは、ドとシの交替で、正規指づかいでも演奏できますが、途中から[6]指（右手中指）はふさいだままにして、

[0123]→[012356]→[01236]→[012356]→……→[01236]→[012356]

とすると、より明快なトリルになりやすいでしょう。

Recorder I の 15 小節や Recorder II の 19 小節などにある「ラ」のトリルは、「シラシラシラー」ぐらいで良いのですが、これは正規指づかいでは演奏できませんので、途中から「シ」の音に [01235] という指づかいを用いて、

[012356]→[012345]→[01235]→[012345]→[01235]→[012345]

という順で練習してみてください。[01235]による「シ」は、正しい音程よりもかなり高くなってしまいますが、他の箇所でも説明したように、これが「音程を広めにする、バロック的な趣味のトリル」なので、これで問題はありません。

Recorder I の 45 小節・53 小節「ソのトリル」は、「高いラ」と「ソ」の交替で、「ラソラソー」ぐらいでいいのですが、正規指づかいでは演奏できませんので、[2345] (高いラ) と [245] (ソ) の交替で演奏してみてください。「高いラ」の方は倍音系の音 (うら声のような音) で、他方「ソ」は基音による音ですので、このトリルには独特な (ピロピロいうような) 味があります。

※ 専門奏者の先生がたもこの独特な味のトリルを好んで用いられますが、もしこれが嫌ならば、[123467] (高いラ) と [1234567] (ソ) の交替という指づかいもあります。こちらの指づかいでは、ソもラも同じく倍音系の音ですから、音のかわり目に特別な味は生じません。

## — Muzette — 難易度 B2 —

ミュゼットは元来は楽器の名前で、それが舞曲の名前として使われることもありました。ちょっと農民ふうの素朴な味わいです。

リピート記号によって2度繰り返される8小節の楽節が7つも連ねられた、かなり長大な曲です。2 fois chaque Couplet. とあるのは、繰り返しの2度目は Recorder I と Recorder II が交替して演奏しなさいという意味だと思いますが、CDの演奏では初級者の練習の便宜を考えて、この処理を行っていません。二人で演奏するときは、ぜひこの「2度目は交替」を実行してみてください。

## — (Gigue) — 難易度 B3 —

**Très vite** トレ・ヴィト (非常に速く) と指定された短い曲で、題名がつけられていません。8分の3拍子ですから、ジグではあるのかも知れませんが、ここでは仮に非常に速いテンポを選んでジグのようなスピード感を出してみました。もう少しゆっくりと、ワルツのように演奏しても面白いと思います。

## — Sarabande — 難易度 B1 —

サラバンドはゆっくりしたテンポの3拍子の宮廷舞曲です。休符をはさみながら進みますので、初級のかたは数え間違わないように気をつけてください。ゆったりと典雅なおもむきで演奏できると良いですね。「シ」のトリルや「ラ」のトリルについては (またトリルそのものについても) プレリユードの解説を参照してください。

リゴドンは2拍子系の、テンポの速い舞曲で、調子のよいスピード感が特徴です。第1リゴドンのあと続けて第2リゴドンに入り、そのあとまた第1リゴドンに戻る（ダ・カーポする）ように演奏してください。戻ったときは繰り返しを省きます。

このリゴドンが本作の白眉ではないでしょうか。一方（おもに Recorder I）を追うように少し遅れて他方が参加してくるという趣向が冒頭はじめ何度も現れ、これがたいへんスリリングですし、2本の線が絡み合って進む音楽が実に生き生きしています。

第2リゴドンは「ハ短調」という暗い調子に変わっています。（「 $\flat$ （フラット）」が二つ書かれています。現代ならば $\flat$ を3つつけるところです。）「 $\text{ミ}\flat$ 」の音をはさまると複雑な指づかい（クロスフィンガリング）が生じやすく、やや難しいところがたくさんありますので、初級のかたはゆっくりとしたテンポでよく練習してください。

Recorder I の8小節、「レ」にトリルがついています。これは「 $\text{ミ}\flat$ 」と「レ」の速い交替ということになりますが、正規指づかいでは演奏できません。そこで替え指ですが、音程を重視するなら、

[0134~~♯~~]→[01345~~♯~~]→[0134~~♯~~]→[01345~~♯~~]→・・・

という指づかいがあります（~~♯~~となっているのは、6指を「半開け」にする意味です）。ただ、この指づかいだと「レ」の音が、かなりくすんだ力のない音色になりますので、バロック的な指づかいとしては、途中から「 $\text{ミ}\flat$ 」のかわりに「 $\text{ミ}$ 」を使ってしまって、

[0134]→[012]→[01]→[012]→・・・

のようにしてしまう方法がよく用いられます。これならば音色が良く、また「トリルの音程が広い」のが華やかだ、というわけです。

Recorder I の12小節、「 $\text{ミ}\flat$ のトリル」も正規指づかいでは不可能ですので、

[02]→[0134]→[034]→[0134]

という順があります。[034]による「ファ」の音は正しい音程より少し高い音です。また、最初からこの指を使って、[034]→[0134]→[034]→[0134] としてしまう手もあります。

## — Menuet —

メヌエットは代表的な3拍子の舞曲です。これもリゴドンの場合と同様、第1メヌエットのあと第2メヌエットに入り、また第1メヌエットに戻ってください。

やはり第2メヌエットはハ短調で、「 $\text{ミ}\flat$ 」の関係する指回りに気をつけて練習しましょう。トリルの難しい箇所があります。リゴドンの解説を参照してください。

解説は以上です。